



「研修便り」は、高知市立学校教職員研修の成果・内容の共有、研究所から発信する情報の周知を目的として、発行していきます。



## 平成29年度 高知市教育研究所 研究員17名 始動!!



横田教育長から辞令書及び委嘱書を受け取りました。

各研究員が自己紹介と決意表明をしました。

今年度は、17名の研究員がそれぞれの領域において研究を行います。各領域の研究内容は、本市の教育課題解決につながるものであり、今後各研究員が設定した研究テーマに基づき、教育研究所も共に、先進的かつ地道な研究活動に取り組みます。年度末には、研究の成果を研究紀要としてまとめ、各校・園にお届けいたしますので、ぜひともご一読いただき、よりよい教育活動の実施にお役立てください。



### ★ 研究員・研究テーマ ★ (平成29年7月11日現在)

研究領域	研究テーマ	所属	氏名
教育相談	教師の支援が変わると、生徒が変わる —解決志向のホワイトボード会議を活用して—	南海中	永原 潤一
		城西中	三浦 洋志
		西部中	川村 真弘
学級経営	セルフモニタリングを活用した自分を語る生徒の育成	西部中	谷本 直子
授業研究	算数科学習における思考のつながりがある学習活動を通じた深い学びができる児童の育成	泉野小	石川 剛史
	支援の必要な児童が深い学びに向かう国語科授業の研究	潮江南小	川元 寿恵
	スタートカリキュラムを土台とした学びに向かう力の育成	江陽小	中村 早希
	理科室で実験授業をするための安全対策づくり	旭中	山田和可奈
情報教育	論理的に思考し、課題を解決しようとする児童の育成をめざしたプログラミング教育の在り方について	秦小	間城 美和
	視覚支援の必要な児童に電子黒板で情報を提示し、仲間と活動する書写の授業をつくる	江陽小	山崎 真路
人権教育	道徳と学級活動の単元化学習を通して育てる自己肯定感と思いやりの心	大津小	大久保瑞恵
	持ち味を生かし、みんなで創り上げる合唱 —「自分にも大切な役割がある」と感じられる音楽の授業をめざして—	介良中	野村 純一
特別支援教育	タブレットPCを活用した支援の必要な児童の自己効力感を高めるための授業	大津小	畠山 佳之
	「こんなにできるよ！」生徒と共に学ぶタブレットPC —軽度知的障害のある生徒へのタブレットPCの活用—	三里中	新居ちひろ
	感覚統合を用いた子どもの不適応行動の変化	子ども育成課 ひまわり園	伊藤 まり
学校事務	学びを支援する学校事務 —教育活動の質を高める予算執行をめざして—	江陽小	岡崎 寛子
		朝倉第二小	細美 佳子

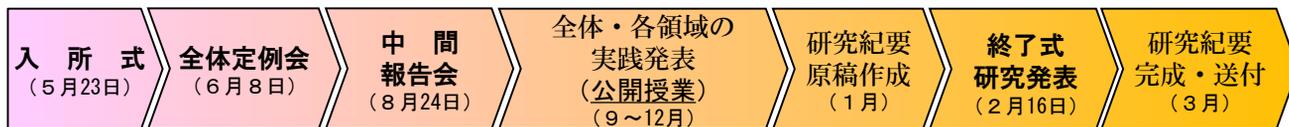


「研究員制度」とは、教職員が研究員として学校等で実践しながら教育課程や学習指導法、学校・学級経営などについて研究を深め、その研究の成果を高知市全体に普及し、学校教育の振興・充実に資することを目的に、高知市教育研究所が行っている研究制度です。



学校で実践しながら、研究に取り組み、教育課題の解決をめざします。

## ★ 一年間の研究の流れ ★



調査研究・領域ごとの定例会

- 中間報告会<8月24日>  
プレゼンテーションソフトを使って、研究の中間報告を行う。
- 実践発表<9月~12月>  
2学期に、代表者による全体実践発表（公開授業）と、各領域及びグループによる実践発表（公開授業）を行う。
- 終了式<2月16日>  
プレゼンテーションソフトを使って、研究の最終報告を行う。

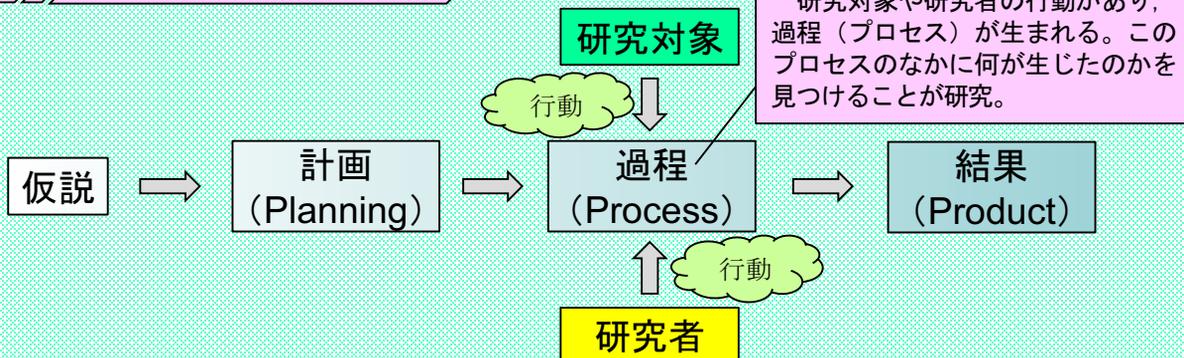


入所式の後、研究員の研究が充実したものになるよう、高知大学名誉教授 刈谷先生を講師として学習会を行い、研究の進め方や論文を書く際に留意しなければならないこと等について学びました。

「学校が変わる・子どもが変わるⅠー授業実践研究ー」

講師:高知大学 刈谷 三郎 名誉教授

### 研究の進め方 (概念図)



## ★ 研究に係る具体的な取組 ★

- ・ 研究テーマ設定について  
研究テーマは、何を研究しようとしているかが明瞭に表現されていることが大切。研究したい内容を表すキーワードを三つ考え、それを構造化することから始める。
- ・ 記録を残す  
よい授業に学び、「やったこと」「やってきたこと」「どんなことがあったのか」などについて、できる限り多くの記録（メモ）をとる。10年間継続すれば、貴重なオリジナルデータが手元に残る。
- ・ プロセスを明らかにする  
「何によって、何がどう変わったのか」に着目し、事例や実践を検証することで研究が濃密になる。プロセス-プロダクト研究において、プロセスのなかに何が起きたのかを見つけることが大切。（計画し取り組んだことを成果や課題と共にまとめる「実践報告」に終わるのではなく、こういうアプローチをしたからこんな結果につながったというプロセス-プロダクト研究を大切にしたい「研究論文」になるように）
- ・ アウトプットすることを恐れずに  
日々の取組を客観的に検証し、その結果を論文としてまとめ、発信する。成果を自分だけのものにするのではなく、責任をもって外に向けて発信し共有する。（能動的でないといけない）